

母子家庭とひとり親家庭の〈あいだ〉

- ひとり親としての日常実践例の考察を通して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
木下 裕紀子

「ひとり親家庭」とは、英語の single-parent family または one-parent family の訳語にあたる。従来、母子家庭・父子家庭を「欠損家族」とみなしてきたことによって付与されたスティグマを払拭し、ふたり親家庭 (two-parent family) と対等に一家族形態として位置づけようと、欧米において提唱された言葉である。

女性差別に起因する女性の社会的地位の低さから母子家庭の生活問題は深刻な状況に置かれるため、貧困・福祉政策の対象として扱われている。ひとり親家庭は、母子家庭、父子家庭をニュートラルな立場で研究しようという意図が含まれているが、社会のジェンダーに由来する固有の困難も抱えている。離婚の増加に伴い、ひとり親家庭も増加することが考えられ、福祉政策の充実が課題として挙げられるが、その視点で捉えた場合のひとり親家庭は母子家庭と同義語として用いられ、「ひとり親家庭」として新たな言葉を得たにも関わらず、その実態が見えてこない。

そこで、ひとり親としての実態を探るべく、ひとり親として生活を営み、子どもが成人した女性3名と、幼い子どもを抱え、これからひとり親として生活を営んでいく女性2名に半構造化面接によるインタビュー調査を行った。一般的に、ひとり親となった女性は、それまでの母親としての役割に加え、所得を確保し、生活を成り立たせる役割を担うとされるが、実際にこれら2つの役割をどのように捉えて遂行しているのだろうか。インタビューにあたり、就労、子どもの養育、活用資源、ひとり親(家庭)について思うこと、という大まかな質問の枠組みを準備していたが、それにとらわれず、話の流れは協力者に委ねた。

その結果、今回の5人のインタビューからは、社会意識を内面化することで母親としての役割意識を強めていく実践、社会意識に対抗する価値観をもとに個としての自己実現を目指す実践、娘としての準備期間を経てひとり親として成熟する実践、の3つの実践様式をみてとることができた。

しかし、これらの実践の中には、未だ母子家庭という言葉が一定の価値を持って存在し、影響していることが分かった。それは、母子家庭とひとり親家庭の〈あいだ〉には空間があることを示しており、さらに、そこには6つのアイテム(社会意識、役割期待、自己定義、子どもへの意識、就労条件、プライベート資源、福祉資源)が存在していることが示唆された。5人はこれらのアイテムに濃淡をつけながらひとり親としての実践を行い、その〈あいだ〉に自己の位置取りをしている。この位置取りが、その人らしさでもあり、ひとり親としてのあり方の多様性を表しているといえる。